

柘植久慶

TOKUMA NOVELS 書下し長篇冒険アクション

六朝の壺





TOKUMA NOVELS

柘植久慶

六朝の壺 りくちよう
つぼ

発行者 荒井 修

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇五

電話四三三・六二三一 振替東京四一四四三九二

©Hisayoshi Tsuge 1988

落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan

〈編集担当 磯谷 励〉

ISBN4-19-153606-0

柘植久慶



TOKUMA NOVELS 書下し長篇冒険アクション

六朝の壺

-0 C0293 ¥680E(0) 定価=680円

六朝の壺・柘植久慶

りくちよう

つぼ

つげ

ひさよし

注目の新鋭、トクマ・ノベルズ初登場！ 元
ノリンベレー大尉という特異なキャラクター
は、各方面から引く手あまた。自身の体験を
綴るかたわら、国際的事件のコメンテーター
としても活躍。その真実に裏打ちされた文章
で発言にこもる迫力は、他に類を見ない。小
説世界でも、大暴れを期待しよう。



TOKUMA NOVELS



書下し長篇冒険アクション

りくちようつば

六朝の壺

柘植久慶



徳間書店

TOKUMA NOVELS

六朝りくちようの壺つぼ

目次

プロローグ

- | | | |
|---|------------------------------|-----|
| ① | 返されてきた茶箱 | 15 |
| ② | 郷原中尉の日記 | 36 |
| ③ | 李蕙蘭
<small>リウエイラン</small> | 61 |
| ④ | 香港——尋ねあてた女性 | 82 |
| ⑤ | 諏訪景太の推理 | 101 |
| ⑥ | 誘拐 | 112 |
| ⑦ | もう一つの家系 | 124 |

8 交換

9 逆襲

10 追跡

11 大壺は偽物？

12 景の地へ

13 発見

エピソード

本文挿画・有馬義仁

プロローグ

老人は旧い中国の服装をして、一人で賑かな大通りを歩いてゐた。往来するのは漢人だけでなく、碧眼に豊かな鬚をたくわえた西域人も少くない。

通りすぎてゆく隊商は、駱駝が中心になっていた。そうした情景が西域に程遠くない都市であることを思わせる。

やがて老人は大通りから外れ、あまり人通りのない路地のような道に入った。質素な門構えの家のところまで来ると、一歩なかに足を踏み入れ、自分が訪れたことを告げる。貧相な中年男が出てきて、丁寧にあいさつすると彼を内部へ招き入れた。

薄暗く狭い廊下であった。なにかもが陰気に感

じられる。だが、老人は平然として男に導かれて歩いた。全く音のない世界を彼は進む。

突当たったところに、わずかだけ明るくなった部屋があった。一段高くなったその中央に、背中を入口に向けた奇妙な衣裳の人物がいる。その傍に似たような恰好をした中年の女が、顔半分だけ蠟燭の灯に照らされて坐っていた。

入ってきた老人が部屋の下手の一隅に物音一つさせず坐った。沈黙が続く。靈能者らしき人物は、呼吸をしている様子が全くなかった。

その人物は背筋をみごとに伸ばした姿勢をずっと保っている。脇の方に控えている中年の女は、蠟燭

の火先の向うに臘ろう氣に見えていた。蠟燭の芯が燃える音が、ときおりわずかにする。

突然、靈能者らしき人物が、この場に少しばかり場違いのような声で、高らかに喋り始めた。

「わたしにとって、これが今生最後の予言となりましょう」

腹から発せられているだけに、その人物の皺だらけの唇はわずかしき動かなかった。

「もうわたしの死は、ついそこまで近づいていきます」

さらに言葉が続く。抑揚の全くない平坦な感じの一本調子の語りくちだった。自分の死に関すること、あたかも他人事であるかのように喋る。

「まさか……」

と、客の老人が小さく洩らした。

「陸和隆さんにはわたしの後半生を通じ、とても言葉で言い表わせないほどのご厚情を賜りました。

だから今日はここに、この世にわたしの遺す最後の予言として、大切なことをお教えいたします。

それは遠からぬ将来、この北斉という交易で栄えた国家は全土統一の礎となる国家により、必ず滅亡させられてしまうのです。北斉はあと少くとも十年は繁栄いたします。けれどそれから二年とその繁栄は続きますまい。

崩壊が始まると、幼い皇帝が帝位に即きます。それから短時日のうちに敵軍がこの鄴きやうの都を占領するでしょう。これは今の繁栄からすると信じられないでしょうが、必ず事実となります」

陸和隆と呼ばれた老人より遙かに年長と思われるその老靈能者は、予言した死が迫っているなどとは考えられないように一気に喋る。呼吸一つ乱すことなく、あたかも何かに駆られたかのようなだった。

陸和隆は大きく目を見開き、まさかという表情をした。だがその全身は小刻みに震え、顔面がひきつ

つたように硬直してしまっている。

それでも辛うじて言葉を見つけると、

「その戦乱から一族が逃れるためには、私たちは一体どんな手段を尽くすべきでしょうか？」

と、すがりつくような調子で訊ねた。

なにかに一縷の望みを託したい、そんな真剣さが漂っている。

だが、老霊能者は首を小さく二度ほど横に振った。そこには冷酷さを感じさせる鋭さがあり、あたかも免れることのできない死を宣告する黄泉の国の使者のようであった。

「国家崩壊の前兆は、ある有力者が暗殺されることです。あなた自身はその事件によって大きな利益を得ます。莫大な富をもたらす権益が転がりこむでしょう。けれどそんなことは短く儚い喜びに過ぎません。」

これからあなたがやるべきことは、子孫のためど

うやって財産を伝えられるか、それだけなのです」

相変らぬ大河の流れゆくような口調で、老霊能者は告げる。それは今までと変りない、考えを巡らすことなく、極めて自然に口をついて出てくるものであった。

「これまで十幾年か、陸家はあなたの指針どおり商売して成功してきました。それだからこそ北斉の豪商の一人に数えられる存在になれたわけです。思えば絹の交易に手を染めたことがその始まりでした。私は今後の十年余りを、言われたとおりに進みます」

陸和隆はたったそれだけの言葉を、幾度も途切れさせつつ喋った。

「そうされるべきでしょう」

「すると何処の地に逃れるなら、一族は救われるでしょうか？」

「混乱に際しては、誰もが青州（今日の山東省）を

目指し避難するはずで。ところがそこへは悲劇の星の下に生れた人物が、秘かに落ちてゆきます。それは敵の知るところとなり、主力部隊を追跡のため、青州へと向けることになります」

「では、それより北を目指せば、私たちは安全に脱出できるでしょうか？」

「そう、北の方角が最良でしょう」

「そうだとしたら、陸家の墳墓の地である景を經由して、さらに北方を考えていますが……」

「その方面なら安全です。できるだけ少しでも遠くに逃れることです。だが、……それだと——」

ここまで喋って老霊能者は、なにか言いにくそうにして言葉を詰らせてしまった。

「それだと何でしょうか。どうか仰言おっしゃってください。何か逃れられない運命があるとしたら、取えて甘受いたします」

必死の表情で陸和隆が頼みこむ。これまでの落着

いた語りくちでなく、焦って上擦った声になった。

「その方角はあなた自身にとって、なにしろこの上ない最悪のものとなります。脱出の旅の途中で、一族のなかであなただけが旅を終えるのです」

静かで落着いた宣告だった。言い終えると老霊能者は最初と同じように沈黙する。最後の言葉が発せられてから、口は真一文字にしっかりと結ばれ、呼吸すらしていない様子だった。

陸和隆は全部の予言が終ったと察し、懷中から用意の紙包を出してそつと置く。

立上ったとき、床が軋きしんで鋭い音をたてた。それと共に空氣が動いて蠟燭の火が大きく揺れた。

陸和隆が西域からの帰化人に大壺を注文してからおよそ十か月後。その康泰こうたい安は召使に駱駝を曳ひかせ、鄴の中心部にある陸の邸を訪れた。

駱駝の背には振分けにしてある、二個ずつのあま

り大きくない荷があった。邸の中庭のところでは前脚を折曲げて坐り、駱駝は荷から解放された。

それらは四個の嚴重に梱包された荷であった。続いて陸家の召使たちにより客間に運ばれ、そこでもう一度、二尺ほどの箱だけにされる。

陸和隆と二人だけになると、康は静かに箱から大壺を取出す。その表情が誇らしげであった。

分厚い絨緞の上で、大壺は静かに横たわっている。鮮かな色彩が陸の視線を釘づけにした。

「陶^{ちうじ}盜に……陶盜にこんな優雅で豊かな色調が表わせるのか……綺麗だ！」

彼はそう呟^{つぶや}く。色について注文は出したものの、それほどまでに見事な出来映えを期待していなかったのだ。

「ご満足いただけましたか？」

康泰安は相手の返答をもう決めてかかり、催促するかのように微笑しながら訊ねた。

「もちろんだよ」

「これぞ西域文化の粹です。以前も申しましたように安石国における、最新の技術で焼成させました」
「ところでこの十六個の文様——これらは一体なにを表わしているんだろう？」

文様の一種ずつを確かめていた陸は、最後に未定だった部分について、描かれていたのがなにか判^{わか}らず質問した。

「十六羅漢像でして——」

「十六羅漢……そうか十六尊者を描いたのか……そうか……」

ぐるり一回転、陸和隆は大壺を慎重に操って確認した。唸るような声を、わずかに上げて呟く。

康は残り三個もすべて箱から出す。四個揃^{そろ}うとさらに一層のこと素晴らしい量感が伝わってくる。威圧感すらあった。

やがて陸の息子の一人が呼ばれた。彼はかなり重

そうにして皮革製の袋を持ってきている。

陸和隆はテールの上に布を敷き、そこへ袋の中味を徐おもひろに出した。快い音をたてて、金貨が次から次へとこぼれ落ちた。音の響きが鈍く変るころ、それらはたちまち小さな山を築く。

東ローマ帝国のソリドゥス金貨だった。西域商人と決済する際、北齊では主としてこの貨幣が使用されていたのである。

そこには東ローマ皇帝の肖像が宗教的威厳すら有して描かれていた。量目は十分の一両（三・七三グラム）程度と小さかったが、殆ど純金に近い、金の純分の高い金貨として信頼されていたのだ。

そこには大人の握拳二個近い分量があった。それをちらい一瞥いちべつした康は、数を算えようともしせず一札する。陸の息子はそれを元どおり袋へと戻すと、やはり一札して康に手渡した。

武平七年（西暦五七六）――。

破局が訪れた。強大な隣国である北周は、突如として東進を開始した。国境はたちまちのうちに突破され、北齊の防禦線はたった数日で総崩れとなった。皇帝後主ごしゅ緯は幼主恒に讓位すると首都を脱出し、幼帝もまた直じきにそのあとを追った。

予言は正に適中したのである。

① 返されてきた茶箱

「やあ、景ちゃん。しばらくだね。ぼくだ、章一だよ——」

受話器の向うから聴き覚えのある声が出てきて、諏訪景太は思わず微笑した。相手は物心ついたところから仲良しだった、従弟の諏訪章一であった。

「何年ぶりかな……で、元気？」

「うん、元気。ところでオフクロが死んだんだ。先月の初めだったけど——」

「何故、ウチにそのこと、知らせてくれなかったんだい？」

「ほら、例の茶箱の件があったろう。だから景ちゃんたち、僕の母にあまり良い感情を持ってないだろ

うから……」

と、章一は言葉尻を濁した。

茶箱というのは、景太の父が弟のところに預かってもらった、外地にいたときの様ざまな思い出の品物を詰めたものであった。ところが景太の叔父が死ぬと、初老性痴呆症に罹った叔母が、それを昔から自分のものだったと主張し始めた。

景太の父はそれを時間の問題と考え、まだまだ自分の身体に自信があったことも手伝って、放置していたのである。ところがその父もまた急死し、いつしか景太が忘れかけた話であった。

そんなことを思い巡らしていると、